

乳がん検診（施設）

動 向

本邦における乳がんの罹患率は大変高く、2位の大腸（結腸・直腸）を引き離し、依然1位であるにも拘らず検診受診率は神奈川県は依然低い。当所では厚労省の指針のマンモグラフィ（以下MMG）併用検診を指針の出る前より任意検診では施行、またMMG検診の乳がん発見率の比較的低い30歳台～40歳台には超音波検診（以下US）を積極的に行ってきた。また他の年齢階層受診者でも逐年受診者にはUS、MMG検診を交互に行うことで、放射線被曝の減少に努めて来た。

乳がん検診の総受診者は20,000人台をキープしているが、近年はやや減少傾向にある。

US群はやや増加しているが、MMG群はやや減少しているのは、上記の理由かも知れない。当所ではある程度精密検査もできるので、所見陽性群を経過観察群に取り込む傾向にある。電子カルテの導入が必ずしも検診の能率の向上に結びついてはいない。

結 果

総受診者は506名1.0%減少、受診モダリティー別では、視触診144名減、MMG243名減、US566名増加、経過観察85名減である。視触診のみは原則として受け入れないのだが、官公庁や企業検診では今だ採用されている所もあり、また30歳台以下の検診で要求される場合もあり、次第に減少傾向にあるが、各顧客の要求が異なる場合があり致し方ない。出来るだけ理解を得られるように努めている。また乳がん検診は乳がんによる死亡者の減少を図るため、発がんの予防のためではないことがまだ周知されていないようである。厚労省がようやくUS検診の採用に向かうようだが、当施設で何年も前から努力して来た方向に向かうのは喜ばしいことである。

要精検率は視触診とMMGでは僅かに低下、US微増だが変動の範囲内である。精検受診率も微動である。発見乳がんは詳細が得られた53例、とほぼ確定だが組織診までは得られていない（細胞診まで）3例を併せて56例である。やや減少しているが、精検の報告が全くえられないものも少なからずあるので、だいたい例年通りと考えられる。

表1、2、3、4、5、6、7表7の発見がんは初診時、あるいは、経過観察中のがんとの診断時と診察時のメトデイークが混合しているので、発見時の主要所見別にすると、視触診0、US11、MMG32、経過観察時の変化13の56名である。やはり客観的所見はMMGが多いと思われる。経過観察群を除いた陽性的中率は4.0%、精検受診者の的中率は5.3%となる。ただ当所の受診者の把握の基準が機械的で、医学統計的には種々のパターンが混合しているので正確なものとし難い。

年齢階級別受診者は40歳台が29.4%と最多で、次

いで50歳台が25.0%、60歳台30歳台70歳以上の順となり40歳～50歳台が54%と中心の分布となる。発見乳がんは56名で1名は年齢不明である。

30歳台1名40歳台13名50歳台10名60歳台25名70歳以上7名と全56名であった。発見乳がんを病態側から見ると55%に腫瘤ないし有意な硬結があり腫瘤無触知だがdimpling或いは血性分泌2名で、何等かの視触診上の異常は30名54%でMMG良性所見群のC-2まで1名の3%以外は視触診を省略しても見逃される可能性がない。US群は11名中2%、経過観察群14名中1名7%のみ視触診無所見であった。経過観察群は別としてMMGのみで視触診を省略した乳癌検診が採用される方向にあるのも故あることであろう。

MMG上カテゴリー3以上29名97%、内石灰化12名41%、腫瘤621%、FADその他の所見31%である。一方US群では9名中C-3以上7例78%は所見がある。C-45、3名、無施行、不明9名もあるためUS群がまだしっかり施行されていない精検施設があるためか結果報告が得られないものがある。

腫瘍の大きさが何等かの形で判明したのは48例85%、この中にはDCISの広がりも腫瘤の大きさが混ざっているが、大きいものは、殆どDCISで、施設検診受診者には腫瘤の大きなものは減多にない。5mm以下1例、1.0cm以下まで8例、2.0cm以下まで16例、3.0cm以下まで21例、3.0cm以上5例、5.0cm以上2例、不明5例で1.0cmまでが17%2.0cmまでが33%で、昨年よりやや大きめだがDCISの広がりが意外に大きいためかも知れない。

組織学的にはIDCが最も多く25例45%、DCIS19例34%、inf papitub caとscirrous ca併せて8例14%であった。

治療は手術48例、非手術、未手術、不明併せて8例。手術の内容はBT+AX12、BT+SLN25、PGT+AX6、PGT+SLN5、不明、未・無手術8。リンパ節転移はno31（62%）、3個以下8、68%はLNは最小で、LN3個以上2、55%はLN転移はなかった。

SubtypeはLuminal type32、H2-、Ki67type7、Trp Neg2、その他・不明13 術前化療2、subtypeにより微増しつつあるため未手術なものがでて来た。

術後療法；Rad12、chemo不明、Hrt5、Rad+Hrt12、Rad+chemo54、不明16、なし9

術前細胞・組織診断法はFNB9、CNB（バコラ）20、ST-M8、US-M10、摘出2、不明5

考 察

当所の受診時併用方法パターンによる分類が以前より情報処理部と成績集計担当者間にずれがあり発見がん者はその主の所見により分類したものである。

関係の集計表は98頁に掲載